

## ワークショップ参加者の意識と行動にファシリテーションが与える影響に関する分析

名古屋工業大学大学院 学生会員 ○島田壮一郎  
 コンティニュー株式会社 非会員 大山 裕之  
 名古屋工業大学大学院 正会員 秀島 栄三

### 1. はじめに

近年、住民主体のまちづくりにおいて市民参加型の会議やワークショップ等の取り組みが定着しつつある。定着するとともに多様化する参加者の間での合意形成を進めるためにファシリテーションが活用される。ファシリテーションとは、議論の進行を促進させることである。しかし、ファシリテーションは議論の場における決定のみに影響を与え、その後の個人の行動にまで直接的に波及させることは難しい。一部の参加者は主題に対して関心が低く、最後まで主体性が現れない場合があることも否めない。参加者の意識によってファシリテーションが与える満足度等が変わる可能性がある<sup>1)</sup>。これまでのファシリテーション技法は、住民主体を前提として開発、使用されてきたと言える。これではファシリテーションが適切に機能するとは限らない。参加者の意識を把握しながらファシリテーションを行うことが必要である。

そこで、本研究では、ファシリテーションが人々の意識、そして行動にどれほど影響を与えうるかを検証する。一つには個々の参加者のワークショップ参加前後の意識の変化を調べる。また一つにはコーチングとファシリテーションを繰り返すことでグループとしての決定と個人の目標達成の二つの効果を達成することを目的とするコーチアプローチファシリテーション<sup>2)</sup>の効果を調べる。

### 2. ワークショップにおけるファシリテーションの役割

「参加者が自ら参加・体験して共同して何かを学びあったり創り出したりする場」であるワークショップ<sup>3)</sup>では、参加者の主体性が求められる。

ワークショップでは目的を達成するためにさまざまな方法が用いられている。いずれの方法も参加者の意識に変化を与えることが期待される。

ワークショップによって参加者がよい結果を得ら

れるようにするためには、参加者が積極的に参加することや楽しんで参加することが求められる。そのためにファシリテーターの役割が重要となる。

ここでファシリテーターとは、ファシリテーションを担う役割を持つ人のことである。ファシリテーターは様々な技法を用いてワークショップを進行する。

以上を踏まえ、以下では、参加者の意識を把握してファシリテーションを行えるようにするために、ワークショップを観察し、参加者それぞれの発言と行動から意識と行動の関係を明らかにする。意識と行動の関連を比較することによってコーチアプローチファシリテーションの効果と参加者の被災経験による違いを考察する。

### 3. 防災マップづくりワークショップの対象地域

野並学区、星が丘学区及び鶴舞学区での防災マップづくりワークショップを対象としてアンケートの分析を行った。野並学区は2000年東海豪雨の際に甚大な被害を受けた地域である。星が丘学区は東海豪雨の際の被害は少なかった地域である。鶴舞学区では学生を参加者として行った。大きな被災経験は無い参加者を集めた。各学区でのワークショップの内容の違いを表1にまとめる。また、野並学区と鶴舞学区ではコーチアプローチファシリテーションを用いた。ワークショップ終了後に全ての参加者にアンケート調査を行った。

### 4. クロス分析による参加者意識の関連性の分析

全ての参加者および各学区でのアンケートの各設

表1 各学区のワークショップ内容

野並学区	防災の地域協力とマップについての議論
星が丘学区	防災マップの議論
鶴舞学区	防災の地域協力についての議論。

表2 全参加者のクロス分析の結果

設問	両側 P	* : P<0.05 ** : P<0.01
Q1「知識や経験が役立ったか」 ×Q13「知識を共有したか」	0.0204	*
Q4「マップを作るにあたって自分が活用することを考えたか」×Q13「知識を共有したか」	0.0366	*
Q12「防災について調べたか」 ×Q13「知識を共有したか」	0.0016	**
Q17「議論を前に進めようとしたか」 ×Q13「知識を共有したか」	0.0410	*
Q8「取り扱った災害以外のワークショップに参加したいか」 ×Q15「次のワークショップに参加したいか」	P<0.001	**

問の結果に対してクロス分析を行い、一方の設問の回答に対してもう一方の設問の回答に有意な差があるかを分析する。標本数が少ないためフィッシャーの直接確率検定を用いた。両側検定の結果、有意水準 P=0.05 以下になった項目を表1および表2に表す。

## 5. 関連性の分析による参加者の意識の影響

クロス分析の結果より「知識を共有したか」という項目と複数の項目の間に関連性がみられ、ワークショップにおいて知識の共有は参加者の意識や行動に影響を与えることが分かる。「自分の知識や経験が役立ったか」という項目と関連性がみられたことから知識の共有をすることによって参加者が提供したものが他の参加者に触れられる機会が増えることで役に立ったと感じる可能性が高くなると考えられる。

「マップを自分が活用することを考えたか」の項目と関連性がみられたことから知識を共有することによって作成するマップの具体的な内容を知ることによって活用することを想像しながら作ることが出来たと考えられる。また、「議論を前に進めようとしたか」という項目と関連性がみられたことから知識を共有することによって議論の対象への興味が増加することで議論に対して積極的になると考えられる。

表3 各学区の参加者のクロス分析の結果

設問	両側 P	* : P<0.05 ** : P<0.01	
野並	Q1「知識や経験が役立ったか」 ×Q13「知識を共有したか」	0.029 1	*
	Q12「防災について調べたか」 ×Q13「知識を共有したか」	0.021 0	*
	Q8「取り扱った災害以外のワークショップに参加したいか」 ×Q15「次のワークショップに参加したいか」	0.007 0	**
星が丘	Q8「取り扱った災害以外のワークショップに参加したいか」 ×Q15「次のワークショップに参加したいか」	0.025 6	*

知識を共有することとの関連性はワークショップに対しての意識だけでなく議論への関与の仕方やワークショップ後の意識に対してもみられ、ファシリテーションの技法として知識の共有を行うことを取り入れることも考えられる。

鶴舞学区についても同様の分析を行った。その結果と3つのケースの比較考察の結果については講演会にて報告する。

## 6. おわりに

本研究ではワークショップの参加者に意識や行動に関するアンケートの分析を行い、ワークショップの参加者の意識と行動の関連について明らかにした。その結果、知識の共有が参加者の意識に影響を与えていることが分かった。さらに各学区の分析結果を比較しコーチングアプローチファシリテーションの影響と参加者の属性による違いを考察した。

## 参考文献

- 1) 森崎孔太, 塚井誠人, 難波雄二, 桑野将司: 司会者の関与が討議参加者の納得に及ぼす影響, *土木学会論文集 D3(土木計画学)*, Vol. 70, No. 1, pp. 28-43, 2014.
- 2) 加藤雄士: コーチングとファシリテーションの活用に関する一考察 — 組織開発, 学習する組織などへの展開 —, *産研論集(関西学院大学)*, Vol. 41号, pp. 59-73, 2010.
- 3) 中野民夫: *ワークショップ-新しい学びと創造の場-*, 岩波新書, 2001.